

《第 480 回（2021 年 3 月 11 日） 子どもの本の読書会記録》 参加者：7人 文書参加：1人

時間：10:00～11:30 場所：オーテピア 4 階集会室

『科学と科学者のはなし 寺田寅彦エッセイ集』 寺田 寅彦/著，池内 了/編 岩波書店

今月の課題図書は、物理学者・寺田寅彦の数あるエッセイの中から、同じく物理学者の編者が少年少女のために編集したもの。寅彦は高知にゆかりが深く、オーテピアの敷地内には銅像もあります。

本書に掲載されているのは、科学の楽しさや不思議が分かるエッセイ、全 38 編。取り上げているテーマは「満員電車」や「線香花火」、「庭の蓑虫」など、身近な事柄ばかりで、日常生活の中で物事をよく観察することの大切さや面白さが伝わってきます。描かれている作者の心情は、現代の私たちにも共感できることが多く、寅彦の随筆家としての才能はもちろん、お茶目で優しい人柄も伝わってきます。

「津波と人間」というエッセイの中では、過去の災害の記録や、災害に関する知識を高めることの重要性が述べられています。「天災は忘れた頃に来る。」この言葉は、物理学者の中谷宇吉郎が、寅彦の言葉として残したものです。この3月の読書会が開催されたのは、東日本大震災からちょうど10年目の3月11日。今回の課題図書は、災害に対して当事者意識を持つことの重要性を、改めて私たちに教えてくれました。

次に、読書会に参加された方々の感想を紹介します。

●初めは難しい本だなと思った。しかし読書会のためにもう一度読むと、とても良いことがたくさん載っていることに気付き、違った読後感が得られた。ちょっと賢くなった気がする。ただの科学の本ではなく、勉強しないといけない、という気持ちになれる本。生きる上での新しい価値観が身についた。

●寅彦は高知にゆかりの人物なので愛着がある。日常生活の中での疑問を科学的に考えているが、答えをずばり述べるのではなく、一つ一つ検証した上で「他にもこう考えられるかも」という立場で書かれている。考え方自体は今読んででも十分通用するし、身近なものを観察して、味わう目を持つことは、すごく良いこと。

●取り上げられている題材が身近で、編集した池内了さんの力量が分かる。科学者というよりは文学者の文体で書かれていて、偉そうな感じもなく、自分のこととして考えることができる内容。夏目漱石との交流を描いたエッセイでは、「普通の人」としての漱石を伝えている。

●読書会に来なかったら知らなかった本。良いエッセイで、孫にも読んでもらいたいと思った。ハチの巣作りのエピソードのように、観察した事実と自分の風景を重ね合わせることで、良いエッセイになる。自分もエッセイを書くが、小さい頃の事実を、どう当時の感覚で言語化できるかということに興味がある。

●五感とユーモアを大事にしている人だと思った。日本の『センス・オブ・ワンダー』。この考え方に、当時の日本はついてこれたのかな？「津波と人間」というエッセイでは、碑が残っているにも関わらず、当時のことを知らないというのは、実際に経験したことがある。過去の災害を忘れてはいけないなと思った。

●寅彦のことは、高校生の頃文学館に行って初めて知った。科学者なのに漱石と交流があることを不思議に思っていた。単なる現象の説明ではなく、身近な近所のおじさんのような親しみやすい文体。地震に関するエッセイでは、人の周期と自然の周期は違うということが印象深かった。ぜひ中高生に読んでもらいたい本。

●寅彦が高知ゆかりの人だと知ったのは数年前。オーテピアの寅彦像の前で友人から椿のエピソードと共に教えられた。エッセイの中で、「津波と人間」は特に印象深かった。「人間はもう少し過去の記録を忘れないように努力をしなければいけない」とあるが、東日本大震災から10年の今、その言葉に重みを感じる。

次回 4月8日(木) 10:00～11:30 オーテピア 4 階集会室

□『キャラメル色のわたし』 シャロン・M.ドレイパー/作，横山 和江/訳 鈴木出版